神社（通称，下鴨神社）の社頭の儀においても雅楽は演奏され，時間がゆったりと流れるような舞や音色は，人々を厳かで雅やかな王朝の世界に誘っている。

このような営みが，舞台となっている寺社等の歴史的な建造物と一体となって，境内やその周辺において展開され，平安時代から綿々と続く宮廷の雅さに，京都の伝統文化を感じさせる。

写真2-83　東遊（八坂神社）

(イ) 能・狂言

室町時代に開花した京都の文化を代表する「能」は，江戸時代まで「猿楽（さるごう）」と呼ばれており，平安時代に宮廷で演じられていた唐に由来する「散楽」と平安中期に生まれた「田楽」が「猿楽」に大きく影響を及ぼし，室町時代に今日の能楽の基礎を成した。

「能」は，観世流，宝生流，金春流（こんぱるりゅう），金剛流，喜多流の五流派があり，各家元は江戸時代に江戸に移ったが，現在京都には一時衰退しその後に再興した金剛流の家元がある。金剛能楽堂は，明治初年金剛家の祖野村三次郎直寛が石清水八幡宮の能舞台を買い取り自宅に移築したものであり，元は室町にあったが平成１５年に現在の地（烏丸今出川下る龍前町）に新たな「金剛能楽堂」が開館し，その際，１３０年近い歴史を持つ能舞台がそのまま移築された。ここでは，数々の能などの公演が行われている。

一方，江戸時代の京都では，能の歌詞である謡曲（ようきょく）を歌う「謡（うたい）」が一般の人々に流行していたことから，後に「京観世五軒家」と呼ばれる家々が観世流の素謡（すうたい）を広めるとともに，「京観世」という固有の文化を形作った。観世屋敷の管理や運営を任された片山家は，現在も京都における流派の中心的存在であり，能楽は観世会館を中心に定期的に開催されている。また，その他の観世流の能楽堂としては，明治時代後期に建てられた京都最古の能楽堂「大江能楽堂」や「河村能舞台」などがあり，ここでも定期的に公演が行われている。

能と同様に猿楽から発展した「狂言」は，明治期以降は，能，式三番と併せて「能楽」と呼び，能の一部として演じられる「間狂言」のほか，いわゆる独立して演じられる「狂言」がある。近代以降，京都では「お豆腐主義」を公言する茂山千五郎家が庶民的な狂言を演じて，好評を得た。江戸家元のものは武家式楽の伝統を今に残す古風で剛直な芸風に対し，茂山千五郎家は写実的で親しみやすい芸風である。

写真2-85　京都薪能

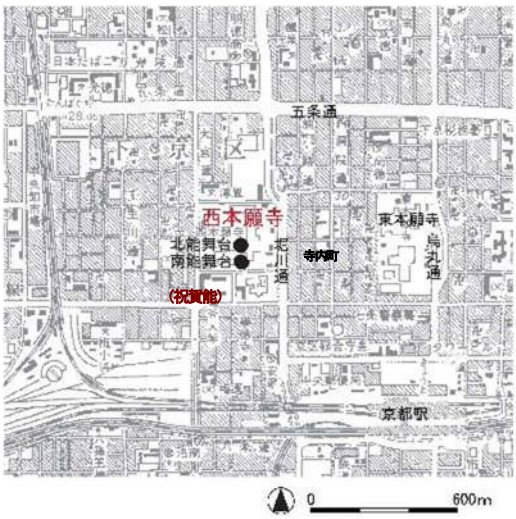

図2-52　宗祖降誕会　祝賀能（西本願寺）

能・狂言が行われる能舞台は，もともと舞台部分には屋根がかかっているが観客席は露天